

# 中学部の研究

「学び」を実感する生徒を  
目指した授業づくり

# 目 次

I	学部研究主題	51
II	学部研究主題設定の理由	51
1	研究の背景	51
(1)	生徒の実態から	51
(2)	これまでの研究の成果と課題	52
(3)	特別支援教育に係る動向とわたしたちの思い	53
2	研究主題について	54
(1)	『「学び」を実感する』とは	54
(2)	『授業における「学び」を実感する生徒の姿』とは	55
(3)	「学び」を実感する授業づくり	56
III	研究目的	58
IV	研究仮説	58
V	研究内容	58
VI	研究方法	58
VII	研究の実際	59
	<b>研究内容 1</b>	
1	本校中学部での「学び」の実感のとりえ	59
	<b>研究内容 2</b>	
	<b>実践事例（国語 A グループ）</b>	63
1	指導期間	63
2	国語グループでの授業づくり	63
3	授業改善の実際	64
4	本実践の成果と課題	67
	<b>実践事例（体育「グランドテニス B グループ」）</b>	69
1	指導期間	69
2	グランドテニスBグループでの授業づくり	69
3	授業改善の実際	70
4	本実践の成果と課題	74
	<b>エピソードノートからみた「学び」のつながり，ひろがり</b>	75
VIII	研究の成果と課題	78
1	「学び」を実感する生徒の姿について	78
(1)	成果	78
(2)	課題	78
2	「学び」を実感し、「学び」のつながりとひろがりを目指した授業実践について	78
(1)	成果	78
(2)	課題	79
	参考・引用文献	80

## I 学部研究主題

# 「学び」を実感する生徒を目指した授業づくり

## II 学部研究主題設定の理由

### 1 研究の背景

#### (1) 生徒の実態から

本校中学部の教育目標は「すこやかな心と体を持ち、実際の生活に生かすことのできる基礎的・基本的な内容（基本的な生活習慣や集団参加能力，社会性，働くこと等を含む）を進んで身に付け，共に力を合わせながら，実践的・主体的に活動する生徒を育成する」ことである。中学部段階は興味・関心の対象や行動範囲が個別的，社会的なものへ移行しつつある時期ととらえ，実態別や異年齢の集団によって友達と一緒に学ぶ機会を増やし，自分の役割意識を高められるようにすることや，生徒一人一人が活動に対して見通しをもって自分なりに気づき，考え，判断することで自己選択，自己決定できる生徒を目指している。

実態別や異年齢の集団学習の経験を積み重ねることで，「ぼくはAさんとBさんと一緒に，2年生の教室で美術の学習をします。」，「Cさんと同じチームで風船バレーをします。」などと，友だちを意識しつつ，学習の場や取組に見通しをもって活動できるようになってきている姿が見られる。また，「Dさんの名前を読めた。」，「わたしは木琴を演奏して，みんなで合奏できました。」など，一人でできる経験を積み重ねることで，集団に所属していることをより強く意識して学習に臨むようになってきている。

さらに，これまでに学んだことを思い出して発表したり，ワークシートやプリントを手掛かりに，自信や確信をもって質問に答えたりする姿が見られるようになってきている。

しかし一方で，自主的・積極的に学習課題に向かう意欲がまだ十分にはぐくまれていなかったり，問題の正解のみを追求してしまい回答の理由が明確でなかったり，学んだことをどの場面で活用するかの判断が難しかったり，応用問題に授業場面で取り組むことができていながらもかかわらず，他の活用場面で発揮しにくかったりする姿が見られる。

これらの生徒の実態から，生徒自身が自分のよさやできること，難しいことやもう少しでできそうなことを分かるようにしたり，「なぜこの学習を行うのか。」「この学習ができれば他の場面でこんなこともできるようになる。」といった具体的な活用場面に気付いたり，行動目標の結果よりも「学び」の過程を重要視できるようにしたりすることなどが必要ではないかと考えた。

そのためには，生徒が個人や集団での達成経験を増やす学習場面を設定して主体的に学習に取り組めるようにすることや，目標と自分自身の思いを関連付けて学習することなど，生徒の内面に配慮した働き掛けが重要になってくると考えた。

## (2) これまでの研究の成果と課題

研究紀要第15集では、教師の専門性を高めつつ、生徒が学校外で活動しやすくするための関係機関との連携を、同第16集では、学校・家庭・社会生活における保護者や関係機関の協力的な参画を得るなどのシステムとしての確立を目指し、生徒の学習環境や周囲の人とのかかわりを大切にしたい取組を報告した。また、前次研究では「学んだことを活用する生徒を目指した数学科の授業づくり」と題して、数学科の授業を通して学んだことを活用する生徒を目指した授業実践を行い、以下の成果と課題を得た。

### <成果>

- 学習前に生徒がどの程度知識や技能を獲得しているか把握するために、実態把握シートを作成し、活用することで生徒の実態から、具体的に焦点化した指導目標や学習内容を設定し、学習における課題分析を通して指導の根拠と方向性を示すことができた。
- 確かな学びを支える四つのキーワード「必然性」「思考・操作」「振り返り」「実践意欲」の中で特に「振り返り」に着目して授業実践を行った。その中で学習の振り返りを丁寧に行うことで、前回学習したことを思い出して、問題解決に同じような方法を使おうとする活用場面が見られるようになった。
- 高等部へ系統的・継続的な取組としてつなげるための情報を生かすために、実態把握シートによる細かな実態把握で、教科の系統性や生徒の習得のペースなどあらかじめ把握し、生徒の学びをとらえた指導目標及び学習内容を計画することで、先を見通した目標設定につなげることができた。

### <課題>

- 実態把握シートを用いた課題分析の方法に関して、教科の系統性を踏まえて、観点や導き方などを明確にする必要がある。
- 実態に応じた迫り方を工夫し、学習課題に対する意欲を高めると同時に評価の充実を図っていく必要がある。具体的には、「なぜこの学習をするのか」ということを子ども自身にアプローチすることの難しさ、疑問を引き出すことの難しさ、「振り返り」を通して「必然性」を高めることの難しさがある。
- 実態把握シートや個別の指導計画は情報としての有効性についての検証する必要がある。

この前次研究までの取組で、学習課題に対する必然性や生徒の思考・操作、学習の振り返り、実践意欲を考えた指導及び支援の在り方を工夫したことで、生徒の主体的な「学び」を深めることができた。そして、授業の中で用いた学習課題の解決方法を、次の授業で生徒が主体的に使う姿も見られるようになった。しかし、学んだことを様々な場面で生徒が活用するというまでには至らなかった。このことは、授業場面で、生徒に答えの理由を聞いても分からなかったり、振り返りにおいて学習課題の内容に関する発言が見られなかったりする様子から、生徒が目指す学習課題の内容や学習課題を解決できたことを十分に理解できていないことが原因ではないかと考えた。このことは、生徒が目指す学習課題の内容や解決した学習課題を十分に把握すること、つま

り「学び」を実感することが大切であり、生徒が「学び」を実感する内面への働き掛けが我々教師にとっての次の課題になると考えた。

### (3) 特別支援教育に係る動向とわたしたちの思い

新学習指導要領では、各教科等にわたり個別の指導計画を作成することが明示され、一人一人に応じた指導の充実が求められている。「生きる力」を育むために、主体性・自律性、自己と他者の関係、個人と社会の関係などを重視している。

これらを受けて、授業づくりでは、発達や環境を整えるとともに達成経験や自分から主体的に対象に働き掛けることを可能にすること、自信や意欲、心の安定といった子どもの情動面へのアプローチを可能にすること、他の場面での活用に必要な抽象的思考に困難を感じるなどの制約に関する支援へのニーズに応じた手だてを工夫していくこと、集団の中で子ども一人一人に応じた活動や参加の姿を保証していくこと等が大切であると考えます。

加えて、体験的・問題解決的学習、生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的学習、生徒相互の好ましい人間関係に着目し、以下のように授業づくりを進めていきたいというわたしたちの思いがある。



写真3-1 生活単元学習「デパートへ行こう」で一人で支払いをする様子

- ・ 自分たちで授業を進めていく、主体的な授業
- ・ 「またやってみたい。」と挑戦したり、授業開始前後に教材を手にとって予習・復習したりするなど意欲的に取り組む授業
- ・ 振り返りの場面で、取り組んだことが分かったり、できるようになったりする授業、つぶやきなど、生徒のかすかな発信を生かしたりする授業
- ・ 「うわっ。」「えっ。」「すご〜い。」などの変化が見える授業
- ・ 伝え合ったり、協力や競争をしたり、相互のよさを認め合ったりするなど、友だちとのかわりがある授業
- ・ 達成感がある授業

このように、生徒の内面に働き掛けて、基礎的・基本的な知識・技能を習得し、実生活場面への活用力をはぐくむことから、生きる力を推進する『「学び」を実感する生徒を目指した授業づくり』は、新学習指導要領のねらいと本研究の方向性に合致するものであると言える。

以上のことをまとめると、次の図3-1になる。

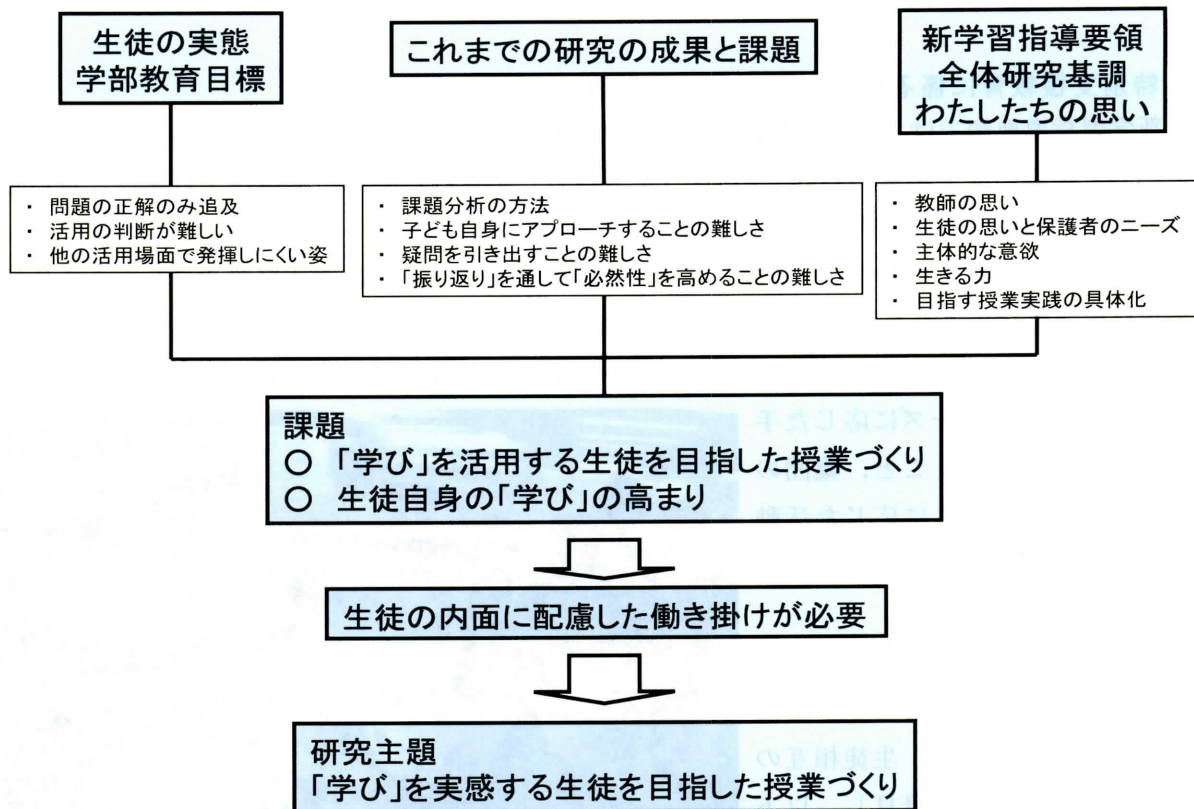


図3-1 研究主題設定の理由

## 2 研究主題について

### (1) 『「学び」を実感する』とは

研究基調において「学び」とは、能動的に自分や自分の周りの世界について一層多くの知識を得ようとしたり、その相互の関係性について納得したりするものであるととらえることができる。

そして、実感するとは、事物に接して得られる感じや、実物に接したように生き生きと感ずることである。このことから、『「学び」を実感する』とは、学ぶことと主体的にかかわることで、新しい関係性や意味に気付いたり、納得したりすることであると考えられる。

しかしながら、本校中学部の生徒たちは、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすい、実際の生活の場で応用されにくい、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないといった学習上の特性が挙げられる。そのためわたしたち教師は、実際の、具体的な内容の指導を継続して行う必要があり、学習活動への主体的な参加や経験の拡大を促していくことが大切である。そのことにより、生徒の内面が具体的な表情等に結び付き、「学び」が実感されたと考えられる。

そこで、本研究では『「学び」を実感する』ということを次のように定義した。

『「学び」を実感する』とは

実際の、具体的な学習活動への主体的なかわり（参加）を通して、学習によって得たことやその意味、関係性について、その子なりの表現方法（言語化、体験化、表情等）で表現すること。

## (2) 『授業における「学び」を実感する生徒の姿』とは

生徒は、すべて偶然に「学び」を実感するのではなく、生活のあらゆる場面において「学び」の実感に迫る姿があると考えられる。この姿を通して、生徒は「学び」を実感していくことになる。「学び」の実感に迫る生徒の具体的な姿はどのようなものか。日常の生徒の姿から考えてみると次のような姿が浮かび上がってきた。

まず、「生徒自身が何を学ぶかが分かり、予想を立てたり、疑問を抱いたりする姿」である。授業の導入場面において生徒は、その日の学習内容が分かり、学習への意欲をもったり、知的好奇心を揺さぶられたりする。また、目標やめあてが分かることで目標達成への意欲をもち、その日の学習に見通しをもつことができる。この姿は、『「学び」に向かう姿』ともいえる。

次に「友達や教師の方法を手掛かりにしたり、今までの経験と結び付けたりしながら実際の、具体的な活動に主体的に取り組む姿」である。授業の展開場面において生徒は、自ら学習に取り組む中で自分が取り組む課題に気付いたり、間違いや難しさに気付いたり、正解の導き出し方やよりよい方法に気付いたりするといった段階から、思考、判断、決定、予想、試行錯誤、発表などの過程を繰り返し、学び方が分かるようになる。また、友達との学び合いを通して更に「学び」を深めていくことができる。この姿は、『「学び」とかかわる姿』ともいえる。

そして「学んだことを振り返り、自分なりの表現方法で表す姿」である。授業の終末場面において生徒は、できたことやできつつあることが分かり、学んだことが分かる。そしてそのことにより、達成感や自信をもち、自己効力感を感じることができる。(写真3-2) また、学んだことをフィードバックすることで「学び」を確かなものにするすることができる。この姿は、『「学び」を見つめる姿』ともいえる。

また、これらの姿は、授業の中でも限られた場面で見られるわけではなく、あらゆる場面で見ることができ、密接にかかわり合っていると考えることができる。

そして、このような生徒の姿を、授業場面や単元・題材を通して目指していくことにより、『「学び」を実感する生徒の姿』に迫ることができると考え、それを目指した授業を『「学び」を実感する生徒の姿を目指した授業』とした。

さらに、こうした授業を日々重ねていくことで、生徒の「学び」がつながり、ひろがっていくと中学部では考えている。それを整理したものが図3-2である。



写真3-2 美術「ねん土でつくろう」での発表の様子

## 授業における「学び」を実感する生徒の姿

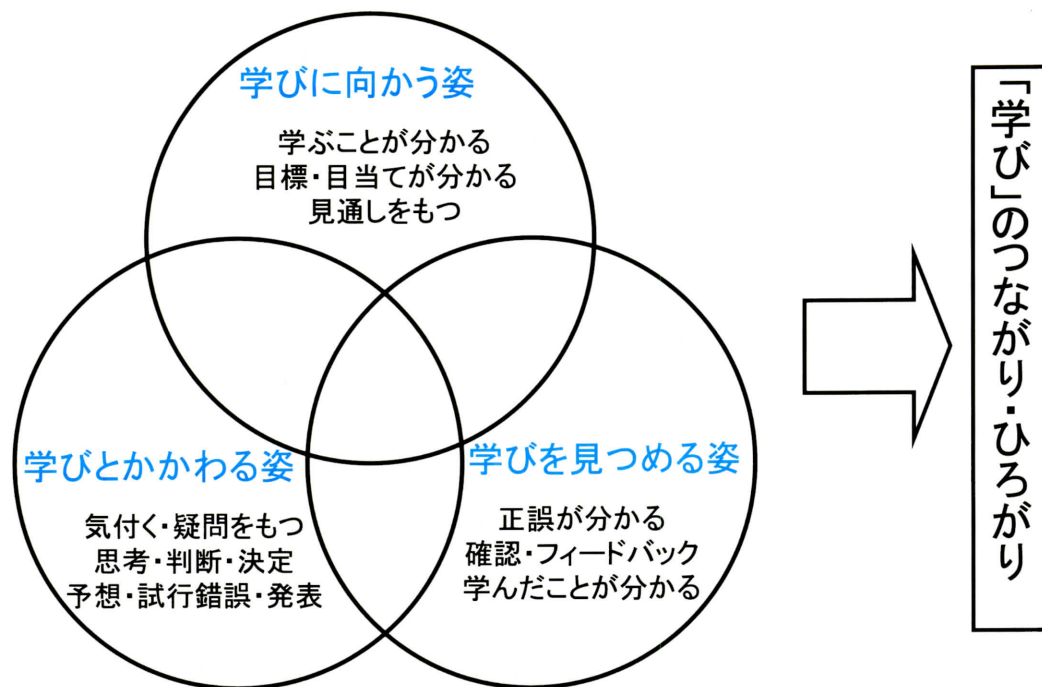


図3-2 授業における「学び」を実感する生徒の姿

### (3) 「学び」を実感する授業づくり

「学び」を実感する授業づくりのためには、「学びに向かう」、「学びにかかわる」、「学びを見つめる」といった各学習過程において、生徒が「学び」を実感するための手だてをより焦点化して設定する必要があると考えた。その設定場面を「実感ポイント」とし、「学び」の三要素「教材・教具」、「人（友達や教師）」「自分」を手だてに、生徒の「学び」をより確かなものにできると考えた。「実感ポイント」に視点を当てた授業を実施する際の準備段階として、全体目標に加え発達検査や行動観察、エピソードノートを活用したエピソード記録等のアセスメントに基づき「学び」を実感する生徒の姿を探ることとした。また、個々の「学び」を実感するための根拠を明らかにして授業改善に取り組むことが大切であると考えた。（図3-3）

具体的には、まず、生徒が「学びに向かう」ために「**めあてを実感**」するポイントを設定した。これは、生徒自身が導入や課題に取り組む前に、何を目標にして学習に参加するのかを理解し、めあてを意識して課題に取り組むことができるようにするためのものである。

次に、生徒が「学びとかかわる」ために「**学び方を実感**」するポイントを設定することとした。これは、生徒が学習課題に取り組む中で、気付いたり、疑問をもったり、試行錯誤したりする過程を通して、課題を解決できる学び方を身に付けることができるようにするためのものである。

最後に、生徒が「学びを見つめる」ために「**学んだことを実感**」するポイントを設定することとした。これは、生徒が学習内容と自分ができたことを振り返ったり、他者評価や自己評価を受けたりすることで、自分がどのようなことを学んだのか、どのようなことができるようになった



のかを理解できるようにするためのものである。

このような三つの「実感ポイント」を設定することで、授業づくりの視点がより明確になると考えた。

※ エピソードノートの意義

日々の授業実践の中で、生徒が「学び」の実感に迫っている姿や「学び」を実感する姿の記録を続け、蓄積していくことで、以下のようなことが見えてきている。

- 表情、言語、行動などからみた、生徒が実感する、実感に迫るまでの具体的な姿
- 実感に至るまでの個に応じた具体的な手だて

表現の変化は、生徒が少し喜ぶ表現、大きく喜ぶ表現など、手だてに対する細かな表現の違いを見出すことができる。

また、教師の手だてに対する生徒の具体的な表現を共有するツールとして用いることもできる。それらの情報を活用し、目標設定や評価を改善したり、指導方法や教材・教具を工夫・改善したりすることで、学習過程や学習活動の充実につなげていくことができる。

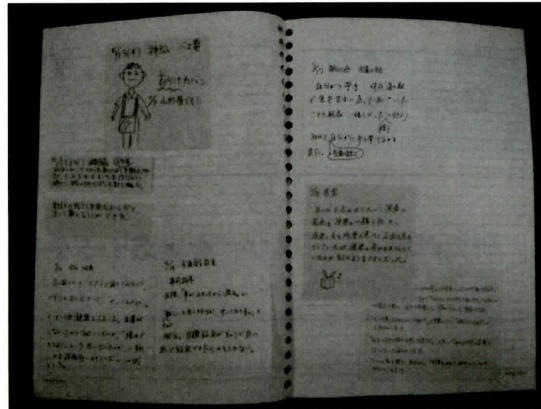


写真3-3 エピソードノート

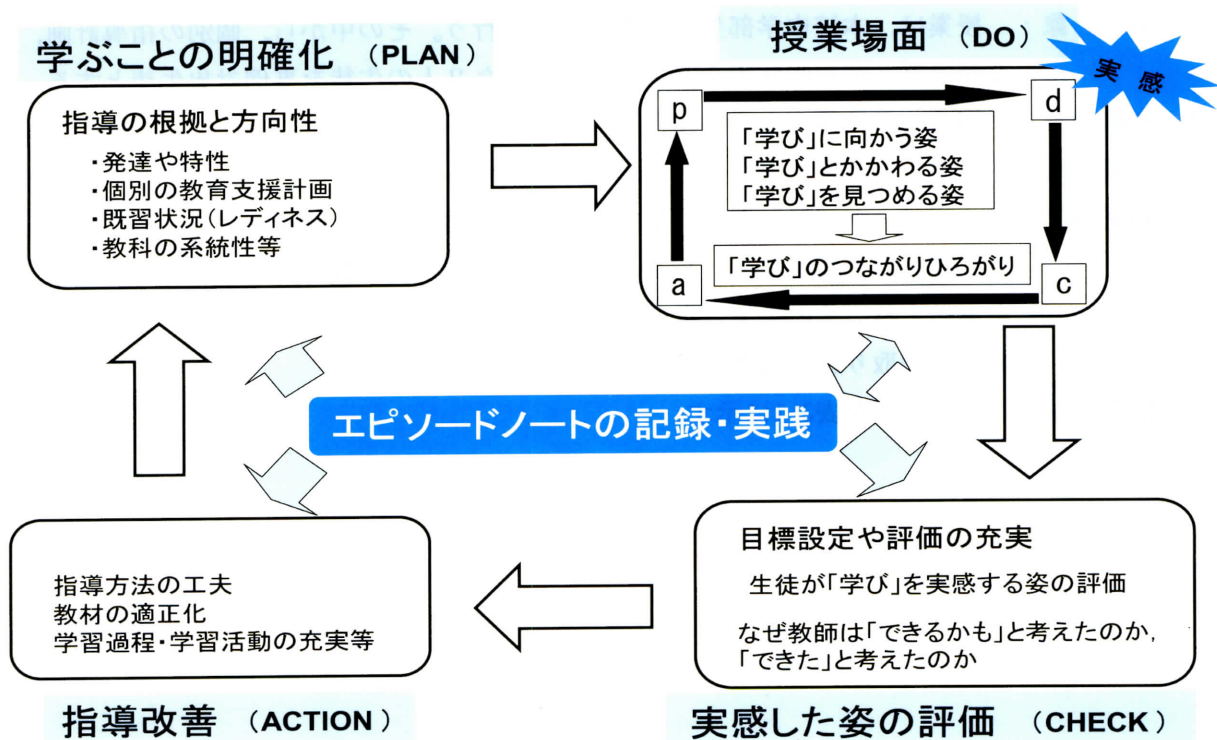


図3-3 エピソードノートを活用した「学び」を実感する授業づくりの手順 (PDCAサイクル)

### Ⅲ 研究の目的

生徒が「学び」を実感することを目指した授業実践の在り方を探る。

### Ⅳ 研究仮説

日々の授業実践において「学びに向かう」、「学びにかかわる」、「学びを見つめる」生徒の姿をエピソードを基に記録し、「学び」を実感するポイントに基づき分析し、職員間で共有することで生徒が「学び」を実感できる授業実践を行うことができる。

### Ⅴ 研究内容

研究内容1 「学び」を実感する生徒の姿を探る。

研究内容2 「学び」を実感し、「学び」のつながりとひろがりを目指した授業実践を行う。

### Ⅵ 研究方法

- 1 対 象： 授業は、本校中学部生徒18人を対象に行う。その中から、個別の指導計画、発達段階、認知特性等を踏まえて抽出した2人の生徒を事例対象生徒とする。
- 2 対象授業： 国語、保健体育を中心に行う。
- 3 活用場面： 学校生活全般、家庭生活において実践する。
- 4 検証方法： エピソード記録によって生徒の変容と授業の成果と課題をとらえる。また、授業場面を広角で撮影し、録画したVTRを用いて学部職員全員で授業ミーティングを実施する。その中で「学びの印象度チェックリスト」やエピソード記録を基に本研究で取り組む授業づくりの有効性を検証する。
- 5 研究計画： 研究計画を表3-1に示す。

表3-1 研究計画

基礎研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文献，先行研究の収集</li> <li>・ 基礎理論の学部内共通理解</li> <li>・ 新版K式発達検査の分析結果による生徒の実態把握</li> </ul>	2009年4月～12月
実践研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ エピソード記録に基づいた生徒の変容の記録</li> <li>・ 「学び」を実感する姿の検討</li> <li>・ 指導計画の作成と検討</li> <li>・ VTRを用いた授業研究会の実施</li> <li>・ 授業における手だての検討</li> <li>・ 授業づくりサイクル（図3-3）に基づいた授業改善</li> <li>・ 他の場面における実践</li> <li>・ 「学び」の印象度チェックリストの活用による評価</li> </ul>	2010年1月～12月
検証及び まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各授業実践のまとめ</li> <li>・ 研究仮説の検証と研究のまとめ</li> </ul>	2011年1月～3月

## VII 研究の実際

### 【研究内容1】 「学び」を実感する生徒の姿を探る。

#### 1 本校中学部での「学び」の実感のとらえ

わたしたちは，日々の授業において，生徒が「学び」を実感する姿を目指すことによって生徒の「学び」がつながり，ひろがっていくと考える。

そのためには，生徒が「学び」を実感する姿をまず明らかにする必要があると考えた。

先にも述べたように，生徒は突然に「学び」を実感するとは考えにくく，「学び」の実感に迫る姿があり，「学び」の実感に迫りながら「学び」の実感に至ると考えた。

そこで，まず，わたしたちは，生徒が「学び」を実感するための過程（プロセス）があると仮説を立てて，授業実践に取り組んできた。その過程を図3-4に示す。（実感プロセスの図）

# 「学び」を実感するためのプロセス

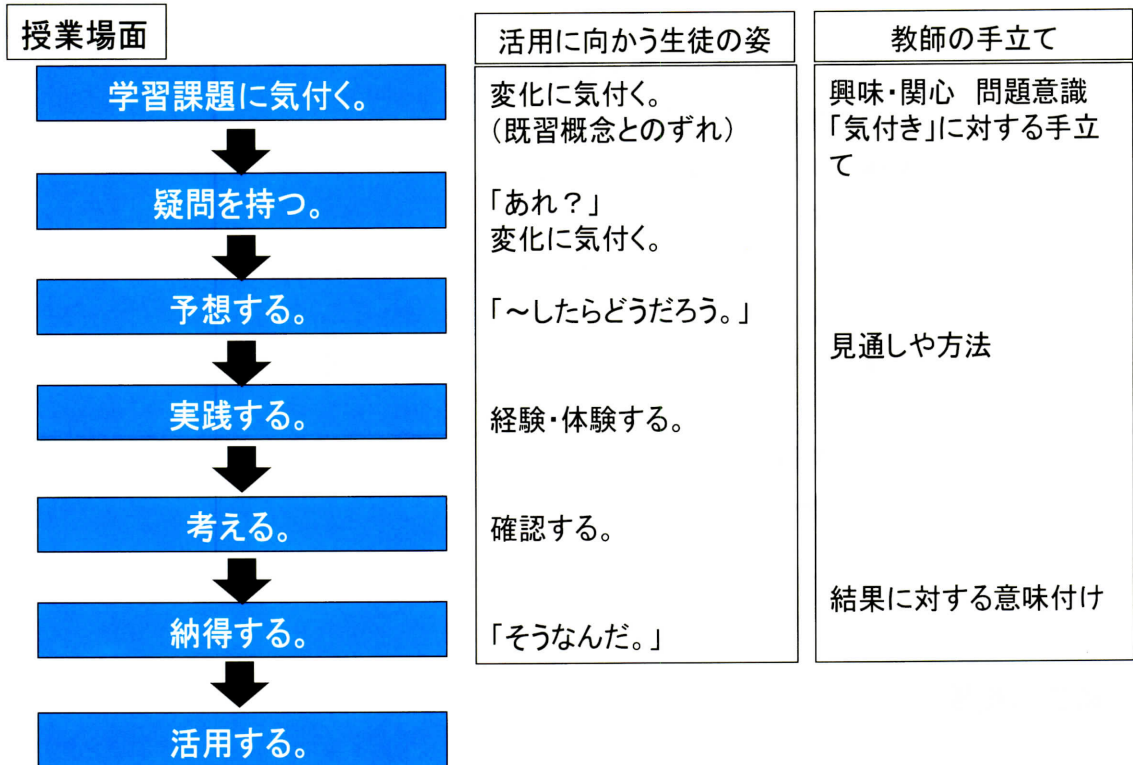


図3-4 「学び」を実感するためのプロセス

しかしながら、生徒が「学び」の実感に迫っている姿や「学び」を実感する姿は、生徒の内面の姿である。仮説どおりに生徒は「学び」を実感していくのかどうか。その内面を探るためにエピソードノートで具現化を図った。

○ 作業学習（班別作業：窯業）の例  
エピソード1

前時までと違う製品作りの説明をしていたところ、Aさんが「やりたい。やりたい。」と大きな声で発言した。そして教師の説明の途中で席を離れ、道具と材料を取りに行こうとする動きが見られた。

このエピソードから考えられることとして、Aさんは教師の新しい製品作りの説明を聞き、まず、「やってみたい。」という意欲をもったと考えられる。

そして、これまでの経験から製品を作るときには、どのような道具や材料が必要か分かっており、実際に準備をしようとし、**試行錯誤**しながら製作に取り組みようとした、と思われる。

このことから意欲をもって「**学びに向かう姿**」と分かることで準備をしようとする「**学びに向かう姿**」、**試行錯誤**しながら学習しようとする「**学びとかかわる姿**」を見ることができる。

## エピソード2

*Bさんは、前時までと違う製品作りについて、教師の説明や手順表を見て工程を確認し、製作を始めた。Cさんは、製作をしているBさんの姿を確認しながら、手順を覚え、製作をすることができるようになった。*

このエピソードから考えられることとして、Bさんは教師の新しい製品づくりの説明を聞き、手順表を見て、何を準備し、製作すればよいか**見通し**をもったと考えられる。

そして、説明や手順表、これまでの経験から製品を作るときにはどのような道具や材料が必要か**気付き**、実際に準備をし、製作に取り組むことができた。

このことから、Bさんが**見通し**をもって「**学びに向かう姿**」と、**気付き**ことで準備や製作をする「**学びとかかわる姿**」を見ることができる。

さらにCさんは、まだ教師が説明していない状態で、かつ工程表をまだ見ていない状態のときに実際に準備して製作するBさんの姿から何を準備し、製作すればよいか**見通し**をもち、どのような道具や材料が必要か**気付き**、実際に準備をし、製作に取り組むことができた。また、Bさんも自分と同じように製作し、同じ製品がきちんとできているCさんの姿を見て、自分の製作過程が間違っていないことを**確認**したことから「**学びを見つめる姿**」を見ることができた。つまり、Cさんが製作に取り組む過程には、Bさんの動きをモデルとし、モデルにされたBさんもCさんの動きを確認することで自分の製作過程が間違っていないことを確認するといった**学び合い**が存在することになる。

このように、生徒が「学び」を実感するためには、一人一人の実態により、それぞれの姿があり、その過程も異なることが分かってきた。

それを基に再び、授業改善を行い、授業実践を重ねてきたが、職員それぞれの「学び」を実感する姿のとらえ方に差があり、同じめあてであっても教師によって生徒の活動量に差が出てきたり、教材・教具が異なったりするといった新たな課題が出てきた。

そこで、より生徒の「学び」を確かなものとするために、もう一度「学び」を実感する生徒の姿（授業において目指す生徒の姿）を再確認し、共通理解する必要が出てきた。ここでは、カードを使って考えを出し合ったり、集約したりし「学び」を実感する生徒の姿をより明らかにし（写真3-4）、授業実践に生かすこととした。

すると、多くの「学び」を実感する生徒の姿が明らかになった。これを整理、分析することで図3-5のようなとらえとなり、これは図3-2で示した授業における「学び」を実感する生徒の姿とほぼ一致した。しかしながら、新たに「**学び合い**」というカテゴリーが分類され、このことから、生徒が「学び」を実感するためには三つの姿だけではなく、それらを促進する要素もあることが分かった。



写真3-4 カードを使った意見の集約の様子

また、このカードを使った集約方法を通して共通理解したことを授業実践に生かすために、授業づくりにおいて生徒が実感をもって理解したり、感じたりすることができるようにしたいことを「実感ポイント」として設定し、更に「学び」の三要素との関連付けを行うことで、生徒が「学び」を実感する授業づくりができるようにした。

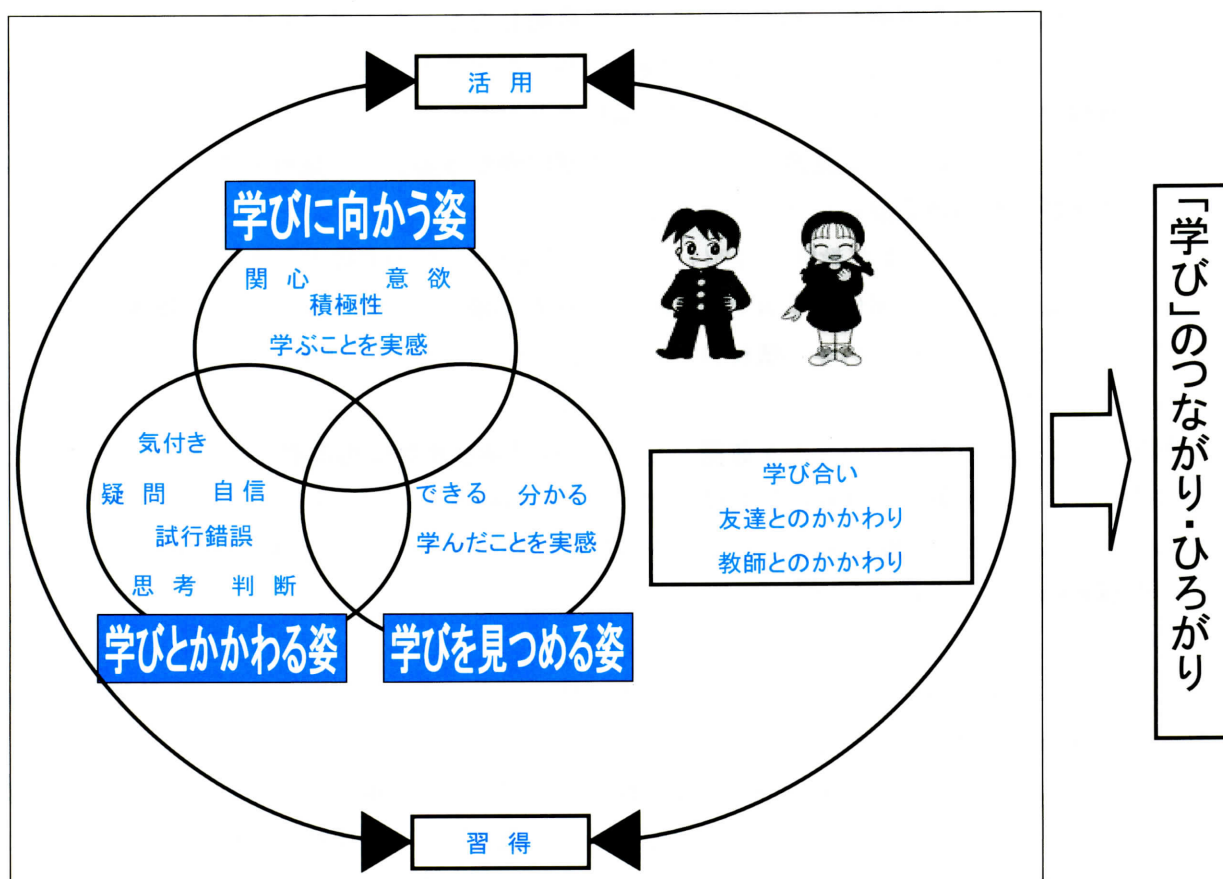


図3-5 本校中学部での「学び」を実感する生徒の姿のとらえ

ここで大切なのは、実感がそれだけで終わるのではなく、その実感が具体的な行動となって現れることである。また、体験の中でどのような気づきを得られたか、どのような感じ方をしたのか、どのようなものの見方、考え方を身に付けたのか、そしてそれらを基にどのような行動をとれるのかということが重要になる。さらに、「時間一杯作業を頑張った。」「終わったー。」「いつもより長く授業に取り組むことができた。」「最後までみんなと参加できた。」という達成感を味わう姿や、「もっとうまくなりたい」と実践意欲を更に高める姿も、学びがつながり、ひろがっていくことになると考えた。

以上、研究内容1で、生徒が「学び」を実感していく内面の姿を探ることによって、生徒一人一人にそれぞれ「学び」を実感するポイントや、「学び」を実感するプロセスがあったこと、また、学び合いというカテゴリーも重要になることが明らかになった。次に、研究内容2で、「学び」を実感し、「学び」のつながりとひろがりを目指した授業づくりについて、実践事例を提示する。

【研究内容2】 「学び」を実感し、「学び」のつながりとひろがりを目指した授業実践

中学部実践事例（国語Aグループ）

1 指導期間

平成22年5月～10月（題材名「ともだちのなまえ」「もののなまえ」）

2 国語グループでの授業づくり

(1) 国語Aグループの生徒の実態

本グループは、要求や身近な出来事について、一語文から二語文で伝えることができる生徒たちや、言語の表出は難しいものの、教師の支援を受けて、絵カードや身振りで伝えることができる生徒たち7人で編成している。2・3年生については昨年からの学習で、平仮名を読んだり、絵や文字カードを見てマッチングしたりする学習を行ってきた。これまでの学習を通して、国語学習への関心・意欲が少しずつ高まってきている様子が見られるようになり、学習に向かう姿勢もできつつあるが、授業において何を学ぶのか、自分が達成すべき目標についての理解が十分ではなく、友達の発表をあまり聞いていない様子が見られることもある。

(2) 授業づくりの視点

そこで、学びをより確かなものにするために、実感をもって理解したり、感じたりすることができるようにしたいことを表3-2のように「実感ポイント」として設定し、授業づくりを行った。実感ポイントに視点を当てた授業を実施する前の準備段階として、発達検査や行動観察、エピソード記録等のアセスメントに基づく個人目標を設定を行い、個人目標の達成に向けて毎時間の授業後のミーティングでの評価を基に、授業改善を行った。

表3-2 国語Aグループにおける実感ポイント

学習過程	学習過程における実感ポイントと実感への手だて
向かう (めあてを実感)	<ul style="list-style-type: none"><li>過去の経験や前時までの学習内容を振り返ることで、本時の学習内容を想起することができるようにする。</li><li>導入時に学習活動の順序を1～3番まで提示することで、活動内容に見通しをもって主体的に取り組むことができるようにする。</li><li>生徒が課題に取り組む際に、発達段階を考慮した個人目標の伝え方を工夫することで、生徒一人一人が自分のめあてを意識できるようにする。</li></ul>
かかわる (学び方を実感)	<ul style="list-style-type: none"><li>教材を操作しながら思考する学習活動を設定し、課題に取り組む中で、気付いたり、疑問をもったり、試行錯誤したりする過程を通して、課題を解決できるようにする。</li></ul>
見つめる (学んだことを実感)	<ul style="list-style-type: none"><li>自己評価や他者評価により答えを確認することで、できたこと・できなかったことを理解できるようにする。</li></ul>

### 3 授業改善の実際

#### (1) 対象生徒

生徒D（中学部3年，男子）

#### (2) Dさんの実態

Dさんは、働く車や食べ物に興味・関心が高く、活動を共にする機会の多い友達や教師に対しては、積極的にあいさつをしたり、身近な話題で会話を楽しむことができる生徒である。また、一つの言葉からいろいろな物事を連想したり、言葉遊びを楽しむことができるなど、表現力豊かになってきている面が見られる。授業場面においては、興味・関心が高い学習には意欲的に取り組むものの、興味が薄かったり、少しでも苦手意識があると、姿勢が崩れたり、すぐに「できません」「分からない。」と言って自信のない様子が見られたりして、取り組むまでに時間が掛かることがある。

新版K式発達検査による発達状況は、以下のとおりであった。

姿勢－運動（P－M）	3：10＋ $\alpha$
認知－適応（C－A）	2：10（発達指数20）
言語－社会（L－S）	2：11（発達指数20）
全領域	2：11（発達指数20）

三つの円を書いたときに、二つを「大きい」、一つを「小さい」と表現したことに象徴されるように、真ん中という概念はなく、二つの世界にいる時期と思われる。課題として、比較して同じ違いを認識したり、「どっち」という言葉を使って選択させたり、二つの世界をより深め、広げられるようなかかわりが望まれる。特にコミュニケーション力があることから、大人や友達とたくさん話すなかで、その世界を広げていくことが有効と思われる。

また、「できる－できない」がはっきりと自分でも分かり、そのいずれかしかないので、最初の一步が踏み出せないことがある。段階的な支援を用意しておくなど、最初はたくさん支援を受けながらも、活動に参加することを目標にして、その後、少しずつ支援の量を減らすことで、自分一人のできる、という自信につなげることができると思われる。



写真3-5 友達に正解を確認するDさん



### (3) 授業改善と改善後の生徒の姿

そこで、実感ポイントに基づき、授業の改善点を整理し、実践を行い、改善点とDさんの変容を表3-3にまとめた。

表3-3 授業改善と改善後の生徒の姿

実感ポイント	向かう	かかわる	見つめる
	めあてを実感	学び方を実感	学んだことを実感
改善点	導入や課題に取り組む前に、何ができたなら目標を達成したことになるのかを、Dさんが理解できる方法や言葉で伝えることで、めあてを意識して、課題に取り組めるようにした。	平仮名の学習をする際に、「①手本を見る②手本を指でなぞる③書く④文字を読んだり、手本の形を見比べたりして確かめる⑤修正する」という一連の流れを繰り返し行うことで、学び方を身に付けることができるようにした。	めあてを確認した上で、Dさんと一緒に手本と書いた文字を比較しながら、できているところと、修正した方が良いところを確認しながら、前時までと比べてできるようになった点を肯定的に伝えるようにした。
Dさんの変容	課題に取り組む際に「今日は（手本）なしで書きます。」や「よく見て書きます。」「ゆっくり書きます。」など、自分の目当てを意識した言葉が聞かれるようになった。	「②手本を指でなぞる」を忘れることがあったが、繰り返し行った学び方の過程を身に付け、自分で行うことができるようになった。	手本と自分が書いた文字を見比べて「ここが惜しかったですね。」や「ここをもっと短くでした。」と修正点を意識しながら、意欲的に修正する姿が見られるようになった。

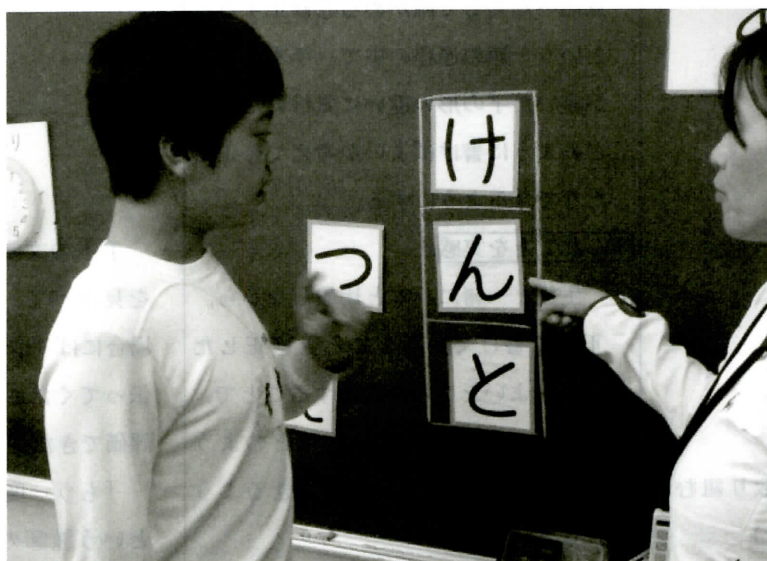



写真3-6 国語Aグループ「友だちのなまえ」の様子

(4) 授業の実際とDさんの学びを実感する姿 <題材名「もののなまえ」(9~10月)>

わたしたちは、授業の実際の流れに沿って、実感ポイントを整理するとともに、Dさんの学びを実感する姿を表3-4に整理した。

表3-4 授業の実際とDさんの学びを実感する姿

主な学習活動	実感ポイントと実感への手だて	Dさんの学びを実感する姿
1 始めのあいさつをする。 2 本時の学習内容を知る。 「物の名前を書いたり、 読んだりしよう。」	<p><b>めあてを実感</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学習する物の名前と平仮名を学習することを伝え、Dさんの目当てとして、手本をよく見て文字を書くことを伝える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「今日は(手本)なしで書きます。」や「よく見て書きます。」「ゆっくり書きます。」など、自分のめあてを意識した言葉が聞かれるようになった。</li> </ul>
3 絵本の読み聞かせを聞く。 4 物の名前を文字カードを並べたり、手本を見て書いたりして読む。 5 個別課題に取り組む。 (ワークシート)	<p><b>めあての実感</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「Dさんはこの(手本)字の形をよく見て、〇〇〇と書きます。〇は横、上から斜め、短く横2本ですね。」と文字をどのように書けばよいのかを確認したり、手本を指でなぞったりして、正しく書くポイントを意識できるようにする。</li> </ul> <p><b>学び方を実感</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「①手本を見る②手本を指でなぞる③書く④文字を読んだり、手本の形を見比べたりして確かめる⑤修正する」という一連の過程の中で、手本と自分が書いた字の形の違いに気付いたり、どのように書けばよいか考えて修正したりできるようにする。</li> </ul> <p><b>学んだことを実感</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒と一緒に手本と比較しながら、正しく書けているところと修正したほうがよいところを確認することで、何がよくできたのか、次はどのようにすればよいのかを理解できるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>手本の文字の形を見て「えー。これは一。こうですね。」と言いながら形を確認しようとする姿が見られた。(写真3-7)</li> </ul>  <p>写真3-7 文字の形を確認するDさん</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>手本の文字と自分が書いた文字を見比べて、明らかに形が異なる場合には「惜しかったですね。」「手伝ってください。」と言って、自己評価できた。</li> <li>「もう一度書いてみましょう。」という教師の言葉掛けに意欲的に応じ、より正確に書こうとする姿が見られた。</li> </ul>

6 学習の振り返りをする。	<b>学んだことを実感</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>板書に沿って、学習内容とDさんができたことを振り返ることで、自分か</li> </ul>	
7 終わりのあいさつをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>どのような学習をしたのか、どのようなことができたのかを理解できるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「〇〇〇を勉強しました。」「〇〇が書けました。」と発表できるようになった。</li> </ul>

#### 4 本実践の成果と課題

本実践を通してDさんの学びを実感している姿を多く見ることができ、同時に課題も明らかになった。本実践における成果と課題を以下のとおり整理する。

##### (1) 成果

###### <「学び」を実感・・・教材・教具>

教材・教具として絵本を取り入れ、読み聞かせの活動での聞くことを通して、いろいろな物の名前が出てくることに気付き、絵本に出てくる物の名前を、積極的に発表したり、「〇〇だね。」とSTに伝えたりする姿がみられるようになった。

また、平仮名の文字カードを並べて物の名前を完成させるだけでなく、自分で文字を書いた後に文字カードを隣にはって確かめるという教材・教具の使い方の定着を図ったことで、自分で答えの確認をして、正しく書けているかどうかを振り返って判断することができるようになった。

###### <「学び」を実感・・・人>

場の設定として、生徒同士の距離、授業者と生徒との距離を縮めたことで、Dさんが授業者に「今日は何をするんでしょうね？」などと言って、教師とのやりとりを楽しんだり、隣の友達と、互いに「次は〇〇君ですよ。」「〇〇君、すごい！」と言って教え合ったり、言葉を掛け合ったりするなど、学び合いや学んだことを共有する姿が見られるようになった。

###### <「学び」を実感・・・自分>

自分が正しく書ける文字や、もう少しで正しく書ける文字があるということを理解したことが自信につながっている。題材名や絵本の名前を読む機会を通して、平仮名がほぼ正しく読めるようになってきている。

また、間違っていることを指摘されると、「なんで？」と言って疑問をもち、どのようにすれば正解になるのかを聞いて、「そっか！」と納得して再度課題に取り組む姿が見られるようになった。

###### <「学び」のつながり>

前時までの学習や経験などから、自分が書けるようになった文字については手本を「見ないです。」と言って、見ないで書くようになり、自信がない文字については「見て書きます。」と言って書くなど、Dさんなりに習得したことと未習得なことを区別して考えるようになり、習得したことはできるだけ自分の力でもう一度やってみようとする姿が見られた。

###### <「学び」のひろがり>

Dさんができるようになっていることを感じる場面を繰り返し設定したことで、自信や文字を書くことへの意欲が高まり、係の仕事である日付や日直の板書に意欲的に取り組んだり、自分から絵本を開いて読んだりする姿が見られるようになってきた。

## (2) 課題

今回の授業実践を通して、Dさんが「実感ポイント」を実感できるような工夫をしたことで、意欲や主体性をもって取り組んだり、挑戦したり、気付いたり、試行錯誤をしたりする姿などが見られるようになった。しかし、指導内容レベルで実感を考えたとき、「こたつ」という言葉を聞いたAさんが「寒いですね。」「冬です。」「粉雪です。」と連想する言葉を次々に言って、いろいろな言葉への興味を示す場面が見られたというエピソードもあることから、Dさんの興味・関心や発達段階を考慮すると、一つの物の名前から、いろいろな言葉の連想につなげたり、実物を見たり、触れたりして言葉のもつ意味を実感できるような授業展開も必要だったのではないかと考える。今後は、学習過程における「実感ポイント」を大切にしながらも、教科の系統性や生徒の発達段階を考慮して指導内容を見直すことで、より学びを実感することにつながるのではないかと考える。



写真3-8 国語Aグループ「もののなまえ」の様子

## 中学部実践事例（体育「グラウンドテニス Bグループ」）

### 1 指導期間

平成21年度 9月～10月      平成22年 9月～10月

### 2 グラウンドテニスBグループでの授業づくり

#### (1) グラウンドテニスについて

「グラウンドテニス」は、本校独自のボール運動である。写真3-9のように屋内運動場のバドミントンコートを広さを基準にして、フロア上のスチロールボールを制止させ、ラケットを用いて相手コートにボールを転がすように打つ。そして、相手ゴールにシュートすることで得点を競い合う運動である。転がるボールを「止めて、打つ」が基本の運動で、ボールの動きに対する敏しよ性や目と手の協応動作、ラケットによるボールの操作性等を高めることができる。

#### (2) Bグループの生徒の実態

本グループは、基本的なラケットの持ち方や使い方、ボールの打ち方が分かり、コート内で相手のゴールに向かってボールを打つことができる生徒6人で編成している。相手コートに向かって打つことはほとんどの生徒が理解できているが、打つ際の力の加減やボールコントロール、相手の動きを見て、その反対に打つ等の技能はまだ十分理解できていない。友達がプレーする際に、応援や得点係等の活動を通して、自他のよさに気付いて参加することもこれからである。



写真3-9 グラウンドテニスでボールをねらって打つ様子

### (3) 授業づくりの視点

そこで、「学び」をより確かなものにするために、実感をもって理解したり、感じたりすることができるようにしたいことを表3-5のような「実感ポイント」として設定し、授業づくりを行った。実感ポイントに視点を当てた授業を実施する前の準備段階として、K式発達検査や体力テスト（MSTB：ムーブメント スキルス テストバッテリー）、行動観察、エピソード記録等のアセスメントに基づく個人目標の設定を行い、授業改善を行った。

表3-5 グランドテニスにおける実感ポイント

学習過程	学習過程における実感への手だて
向かう  (めあてを実感)	<ul style="list-style-type: none"> <li>過去の運動経験や前時までの学習内容を振り返ることで、本時の学習内容を想起することができるようにする。</li> <li>導入時に学習活動の順序を提示することで、活動内容に見通しをもって主体的に取り組むことができるようにする。</li> <li>生徒が課題に取り組む際に、グループの発達段階に応じて個人目標の提示を工夫することで、自分のめあてを意識できるようにする。</li> </ul>
かかわる  (学び方を実感)	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループ内での個人練習やミニゲームを通して、ルールを理解や技能の向上を図る実践的な学習活動を設定し、取り組む中で気付いたり、疑問をもったり、試行錯誤したりする過程を通して、課題を解決できるようにする。</li> </ul>
見つめる  (学んだことを実感)	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゲームの結果や他者評価、自己評価で毎時のめあてを確認することにより、到達度を理解できるようにする。</li> </ul>

## 3 授業改善の実際

### (1) 対象生徒

生徒A（中学部2年，男子）

### (2) Aさんの実態

Aさんは、経験したことを時系列に沿って発表することができるようになっている。しかし、興味のある活動に対しての意欲がますます高まり、すべて自分であろうとする自立心がより強く表出してしまいう傾向にある。一つの活動に集中するあまり、次の行動への切り替えに時間が掛かることもあるが、その状況についての理由や気持ちを整理し、言葉で伝えられるようになることで、他者からの働き掛けを素直に受け入れることができることもある。

新版K式発達検査における発達状況は、以下のとおりであった。

姿勢－運動（P－M）	3：6 + $\alpha$
認知－適応（C－A）	2：6（発達指数 22）
言語－社会（L－S）	2：1（発達指数 19）
全領域	2：5（発達指数 22）

課題として、「自－他の区別，始－終の操作性の獲得，縦－横の操作，大－小の概念形成」であると思われる。課題として何かを比べることや，二次元的な広がりのある課題をすることがこれからの力の獲得に不可欠となる。それと同時に，今後，できなかったときの気持ちの崩れが見られるなど，「できる－できない」の評価を始める可能性は十分ある。気持ちの立て直しができるように，支えになるような人や物の存在が重要になってくる。

言語面では，日常生活の中で使用している言葉については上手に発話できているが，更に語い数を増やすために，絵本の読み聞かせや，実物（実態）と結び付くような教材・教具の提示や言葉掛けが有効であると考えられる。

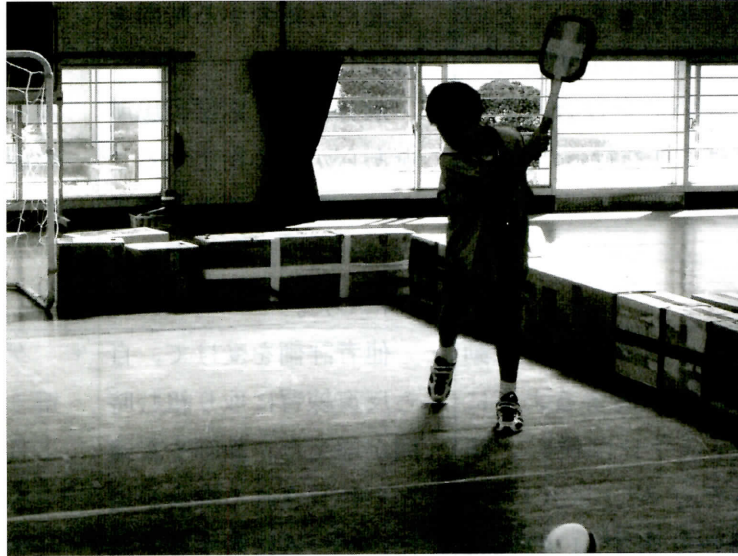


写真3-10 右手を高く振り上げて打ち下ろすAさん

21年度（中学部1年）は，Aグループ（ラケットでボールを打つ，的に当てる等を中心とした学習グループ）で活動したAさんについては，ボールを使った運動への興味・関心が更に高まり，意欲も高いので「ボールを追い掛ける。」ことと「ボールを強く打つ。」の2点を重点目標に活動を行うことができた。「来年度は，相手とのゲームを重視したBグループでの活動も可能ではないか。」との担当の意見や本人の希望「友達とゲームをするよ。」を踏まえて，今年度は，当初からBグループで編成を行った。

### (3) 授業改善と改善後の生徒の姿

わたしたちは，授業の実際の流れに沿って，実感ポイントを整理するとともに，Aさんの学びを実感する姿を表3-6に整理した。

表3-6 授業改善と改善後の生徒の姿

実感ポイント	向かう	かかわる	見つめる
	めあてを実感	学び方を実感	学んだことを実感
改善点	<ul style="list-style-type: none"> <li>全体進行の掲示板やめあてカード等を手掛かりにして、学習内容を確認し、グループ内での対戦表や担当表を用いた。</li> <li>教師と一緒に、グループ内で頑張りたいことの発表時間を設定することで、互いに学び合うきっかけづくりを行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身体ガイダンスを中心に、反復運動による、ボール運動の技能習得を目指して取り組む方法に加え、うまくできた動きを教師と一緒に確認し、友達にも紹介する時間を設定した。</li> <li>水分補給、応援の場所をあらかじめ指定することで、動線の確保と選手交代の時間短縮を図るようにした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループ活動終了時にも振り返りを行うことで、グループで取り組んだことをより具体的に自己評価することができるようにした。</li> <li>整理運動後の全体の場での振り返りで各グループで頑張った友達の紹介の時間を設定した。</li> </ul>
Aさんの変容	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゲーム以外の当番活動にも意識が高まるようになり、「今日は僕だ。頑張るぞ。」や、「〇〇さんお願いします。」の言葉掛けが増えた。</li> <li>「〇〇君、一緒に頑張ろうね。」の言葉掛けが増え、自他共にお互いの目標を意識するようになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>他者評価を受けて、自ら反復練習に取り組む時間が増えた。教師や友達から称賛される機会が増え、ゲームに対する意識の高まりが見えた。</li> <li>応援中に友達とふざける場面が減り、応援に集中する時間が増えた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゲーム内容をすぐに振り返ることができるようになり、得点に対する関心が一層増した。(写真3-11)</li> <li>全体の場での振り返りでも友達を意識して称賛したり、称賛されて喜んだりする姿が見られた。</li> </ul>




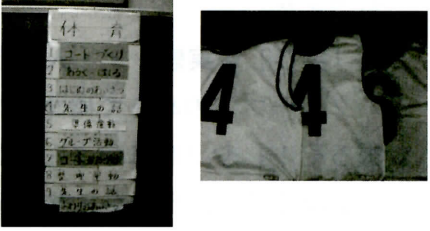
写真3-11 得点を実感してゲームに取り組むAさん



(4) 授業の実際とAさんの学びを実感する姿 <題材名「グランドテニス」>

わたしたちは、授業の実際の流れに沿って、実感ポイントを整理するとともに、Aさんの学びを実感する姿を表3-7に整理した。

表3-7 授業の実際とAさんの学びを実感する姿

主な学習活動	実感ポイントと実感への手だて	Aさんの変容と学びを実感する姿
<p>1 始めのあいさつをする。</p> <p>2 準備運動をする。</p> <p>3 本時のめあてを知る。</p>	<p><b>めあてを実感</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>全体進行表に加え、グループ内の対戦表（写真3-13）やめあてを掲示することで、グループのメンバーや学習内容を理解し、活動に見通しをもつことができるといったようにした。</li> </ul>  <p>写真3-13 対戦表</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>廊下の掲示物（写真3-12）や教材を見て、「今日も頑張るぞ。」と身体表現することが増えた。（関心・意欲）</li> </ul>  <p>写真3-12 掲示板とビブス</p>
<p>4 グループ練習をする。</p> <p>5 ミニゲームをする。</p> <p>6 学習の振り返りをする。</p> <p>7 終わりのあいさつをする。</p>	<p><b>めあてを実感</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>全体目標を受けて、グループ内で「頑張ること」の発表時間を設けるようにした。</li> </ul> <p><b>学び方を実感</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>再度2グループに分け、交代でシュート練習に取り組むことで、個人の活動時間を十分確保できるようにし、友達の動きも確認し、評価する時間を設定した。</li> <li>得点係や応援係、計時係を交代で行うようにし、ゲーム以外の時間も、友達やゲームに対する意識を持続することができるようにした。</li> </ul> <p><b>学んだことを実感</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>グループのめあてカードや対戦表を手掛かりにして、活動を振り返ることで、グループ内の評価を基にして、次時の学習内容を想起できるようにした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自らビブスを着用したり、友達と一緒に準備運動に取り組んだり、ラケット準備をしたりするようになった。</li> <li>前時のめあてを振り返り、本時の内容を発表することができた。</li> <li>『A君は、「止めて、打つ。」が速くなったね。』と友達や教師からの評価を受けて、「頑張ります！」と答えた。</li> <li>対戦表を手掛かりにして「次は〇〇さんです。」と言って友達に教えたり、ホイッスルの合図で得点板に印を付けたりと、自ら応援する場面も増えた。</li> <li>授業後、別グループの担任教師に対して、「楽しかった！」と発表する場面が増えた。</li> </ul>

### 3 本実践の成果と課題

本実践を通してAさんの学びを実感している姿を多く見ることができ、同時に課題も明らかになった。本実践における成果と課題を以下のとおり整理する。

#### (1) 成果

##### <「学び」を実感・・・教材・教具>

授業準備の際、始点と終点に分かれて教師が立って、必要最小限の言葉掛けのみで指示することにより、コート設営用の段ボールを自ら運搬する意識を高めることができた。併せて、水分補給や応援の場所をあらかじめ指定することで、生徒の動線を確認し、ゲーム→得点係→計時係→応援のサイクルが定着し、活動内容の充実（運動量の確保）と選手交代等の時間短縮を図ることができた。

##### <「学び」を実感・・・人、自分>

グループでのめあて確認や振り返りの時間を設定することで、「○君と一緒に（得点係を）頑張るぞ!」や「次は○さんと試合をするよ。」といった言葉掛けが増え、教師の具体的な働き掛けがなくても、自分から友達を誘って試合の準備や係に取り組む姿も見られてきた。

##### <「学び」のつながり>

Aさんは本題材の経験を生かして、次題材でも準備（ビブスの着用等）に自ら取り組む姿がよく見られるようになり、行動の切り替えとともに、学習開始に出遅れることも少なくなった。また、ラケットの握りを教師と一緒に工夫することで、ボールの中心に当てることができるようになり、ゲームの中でも強い打球で相手ゴールをねらうことができるようになった。振り返りの場面で称賛することにより、自己評価の意識が高まり、他の生徒への意欲を高めるきっかけにもなった。

##### <「学び」のひろがり>

授業以外のAさんの変容として、共通作業「はし作り」の活動で、作業の手順カードと出来高表を手掛かりにして、約60分間時間一杯取り組むことができるようになった。また、数学科の学習活動にボウリングゲームを取り入れた際、ピン並べや数字カードの配付に主体的に取り組み、「自分たちで準備、片付けをする。」という意識も高まってきた。これらの実感が学びの習慣につながり、今後も活用場面がひろがっていくことが期待される。

#### (2) 課題

ボールを強く打つために、ラケットを持つ右手を高く振り上げてシュートする技能も高まってきた。しかし、勢い余ってラケットを放り投げてしまう場面も見られるようになり、力のコントロールと安全に対する意識（ラケットはコート内で使う。）を高めることも必要になってきた。

まだゲームに取り組みたいあまり、片付けの活動で滞りが見られた際には、次の活動を保障したり、見通しのもちやすい活動を提示したりするようにしたが、教師の働き掛けだけではなく、同グループの友達や級友を活用して、学び合いの場をできるだけ多く設定できるようにしたい。

## エピソードノートからみた「学び」のつながり、ひろがり

わたしたちは、授業実践を通して、「学び」が繋がったり、ひろがったりしている姿を見ることができた。

そこで、エピソードノートに基づく「学び」のつながり、ひろがりについて、以下のとおり例示する。

### エピソード3（9月17日）

共通作業（はし作り）において CT が作業の流れについて説明をした後、「それでは作業を始めましょう。」と言ったところ「めあてを決めないと。」と言った。

このエピソードから考えられることとして、Dさんは作業に取り組む前にめあてを確認することで「やってみたい」という意欲をもち、「学び」に向かっていると推測することができる。彼に分かりやすい目標を設定することが、彼の「学び」に対する意欲を高め、「学び」を実感する姿に迫ることができると思う。

### エピソード4（10月21日）

校内実習において、はし作り作業に取り掛かろうと教師が言葉掛けをしたところ、「めあてがないとみんなが頑張れないです。」と言った。

このエピソードから考えられることとして、Dさんはエピソード1と同様に、めあてを確認することを重要視していることが分かる。同じはしづくりの作業において、このようなエピソードがみられたことから、「めあての確認（目標設定）」→意欲（「学び」に向かう）という点で彼の学びはつながっていると考えることができる。

### エピソード5（9月22日）

数学の「魚釣り」の題材において、Dさんに釣ってもらった魚の見本を示したところ、ガッツポーズをしながら「同じ（魚）を釣ろう！」と発言した。

このエピソードから考えられることとして、Dさんは、これまでの学習の流れから自分なりにその時間のめあてを考え、発言したと推測される。このことは、エピソード1・2と同様に、目標設定をすることで、「学び」に向かおうとしている彼の姿をみることができる。作業学習だけでなく、数学においてもこのような姿がみられたことから、彼の「学び」はひろがっていると考えることができる。

### エピソード6（9月22日）

帰りの会の一日の反省で「今日は魚釣りをしました。同じ（魚）を釣って、1、2、3を数えました。皆さんはどうでしたか。」と発言した。

このエピソードから考えられることとして、Dさんは数学の授業で自分から「同じ（魚）を

釣ろう！」と目標設定をし、学習したことで、自分から学んだこと（マッチング）を振り返り、みんなの前で発表することができた。このことから、彼に分かりやすい目標を設定することが、彼の「学び」に対する意欲を高め、「学び」を実感する姿に迫ることができると思う。これも学びのひろがりにとらえることができる。以上のことを踏まえ、図3-6にまとめた。

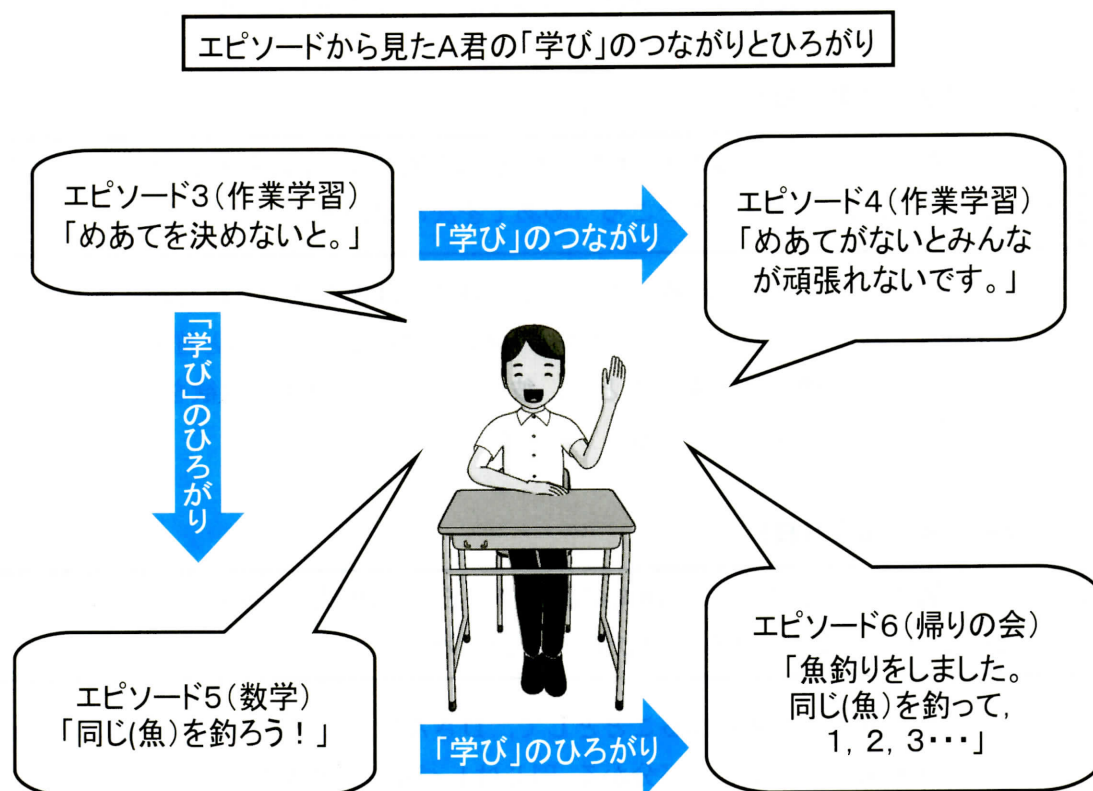


図3-6 エピソードから見たDさんの「学び」のつながりとひろがり

そのほかにも以下のようなエピソードが挙げられた。これらのことからDさんの「学び」を実感する姿や「学び」がつながり、ひろがる姿をみることができると考えられる。

#### エピソード7（4月23日）

体育で同じところにじっと立っていて手の届く範囲でボールを拾っていた。落としてしまうとすぐ眉間にしわを寄せてやる気を失ってしまう。ボールに触ることができた場面で、褒められたり、「すごい！」や、「やるぞ!」「いくぞ!」という挑戦しようという気持ちを引き出す言葉掛けで、前向きに学習に取り組めるようだ。

#### エピソード8（5月6日）

友だちが風船バレーボールのゲームを見ている状況で、「頑張るぞー。」「いくぞー。」と自分や友だちを励ます言葉掛けで、意欲的に取り組む様子が見られた。

### エピソード9（5月14日）

Dさんの近くにいた友達に対して、「ピアノを弾いてみる？」と教師が尋ねると、Dさんが「やってみようか。」と自分から友達を誘った。なかなかピアノに手を伸ばさない友達のフォローをしたのか、自分はできますよ、という思いだったのか分からないが、友達、教師とのかかわりの中で積極的に取り組んだ。

### エピソード10（7月5日）

美術の時間に絵の具を使うかどうか尋ねられ、「いいです。」と行ってなかなか手にしなかったが、絵の具を目に見える場所に置くと、すぐにチューブを手にとってスムーズに活動を始めることができた。

### エピソード11（9月22日）

保護者と教師との情報交換の中で、保護者から「最近話の内容が詳しく、家族や近所の方に対する優しい言葉掛けが増えてきました。」とあった。学校でも「寒いですねえ」だけでなく、「丁度いいですねえ。」「涼しいですねえ。」「風がビュービュー吹きますねえ。」など、別の表現に挑戦したり、感情や思いを表現する言い回しが増えたりしてきつつある。

言葉掛けが有効なDさんに対して、自ら挑戦しようとする「学び」に向かう意欲の喚起できる言葉掛け、目標設定の指標、教材・教具の配置や提示の仕方、学習を振り返る際のより有効な手だてなど、教師間で共有して実感に迫る具体的な姿を増やすことができてきた。

また、例えばエピソード6のような帰りの会の姿は4月当初は全く見ることはできなかった。そのころの反省は「今日は国語をしました。どうですか。」というような、その日学習した中で彼の印象に残っている活動名を挙げるだけで、内容に触れることはなかった。このことからみても、授業改善によって、彼が「学び」を実感していることが推測される。

以上これらの授業実践において、生徒の姿をとらえたエピソードノートを用いることにより、授業改善で用いた「学び」の三要素の具体的な手だてを検討することができた。

また、「学び」を実感する生徒の姿を意識して実践を行ったことで授業改善の視点が焦点化され、生徒の「学び」のつながりやひろがりを促進することができたと考える。

## VIII 研究の成果と課題

わたしたちは、生徒が「学び」を実感する授業づくりを目指し、「学び」を実感する生徒を目指した授業実践を行ってきた。

最後に、今次研究でわたしたちが取り組んできた二つの研究内容の成果と課題を述べる。

### 1 「学び」を実感する生徒の姿について

#### (1) 成果

- 「学び」を実感したことを他の教科や指導の形態に関連させて取り扱うことにより、様々な表現が見られるようになり、エピソードノートに新たな記録として現れてきた。
- エピソードノートにより、生徒の言動や変容を学部職員で共有することで、生徒の実態を深くとらえ、他の学習活動でも活用できる場面が増えた。
- 教師の子どもを見る視点として、子どもの内面についての実態把握が行われるようになってきた。子どもの思いと関連して子どもの表現する姿を見るようになってきた。
- 子どもが学びを本当に習得した（できるのか、できないのか）のかを、教師の意識の向上とともに、より深く見るようになってきた。

#### (2) 課題

- 「実感」ということ自体が内面にかかわることであり、客観的な評価が難しい面がある。
- 「学びの印象度チェックリスト」も評価の一つになると思われるが、教師が何のために、何を実感できるようにしたいのかをもう一度整理する必要がある。

### 2 「学び」を実感し、「学び」のつながりとひろがりを目指した授業実践について

#### (1) 成果

- 『「学び」を実感する』ことの定義を学部内で共通理解することで、実感ポイントを絞り込んだ指導方法について協議することができた。併せて、授業ミーティングを行う際のねらいがより焦点化された。
- 「向かう（導入）」「かかわる（展開）」「見つめる（終末）」の各学習過程において、「学び」を実感するための教材・教具の工夫や、人、自分とのかかわりを意識した発問、言葉掛けの工夫等が多く見られるようになった。
- 教材の使い方に慣れ、友達を意識して学習活動に望むことで、自分なりに考えて達成までの方略を工夫する姿が多く見られ、時間一杯集中して取り組む姿もよく見られるようになった。
- 「学び」の三要素である「人」「教材・教具」がより整備され、教材・教具や集団活動での個への配慮が洗練されてきた。教材・教具や友だち、教師の複数の存在が与える効果を考えて、手だてを設定するようになってきた。
- 学習環境を整えたり、学習の流れを統一したりしたことで教師の支援の程度を段階的に軽くしても進んで行動する場面が多く見られるようになった。
- 子どもたち自身にめあての意識付けを図ることで、「何を学ぶのか」の意識の継続が見られるようになってきつつあるのではないかと考えられる。

## (2) 課題

- 実感ポイントの絞り込みによる、具体的かつ客観的な評価の在り方を検討する必要がある。
- 「学び」の設定については、前次研究の成果であり課題でもある。課題分析を通じた指導根拠と方向性の示し方をどのように(活用)したかを表したり、意識したりしておく必要がある。
- 「学び」の三要素の一つである「自分」を授業の中で、どのような形で表していく(どのように子どもが自分のことに気付けるようにする)か、そして「学び」を実感する姿にどのようにつなげていくかが課題である。
- 三つの実感ポイントに視点を当て、それぞれのポイントで生徒の実感する姿が見られたが、今後はその実感を基にして、実感をもって学んだことがどのようなことにつながっているのかという、「学び」のつながりを大切にしたい授業づくりを行う必要がある。

以上の研究の成果と課題を受け、今後も「学び」を実感する生徒を目指した授業実践を継続していくとともに、他の題材でも授業実践を重ね、具体的かつ客観的な評価の在り方を探り、指導に研究の成果を生かすことができる実践研究を進めていきたい。



写真3-14 保健体育「風船バレーボール」の様子

## 【引用・参考文献】

- 安彦忠彦編(2008) 「活用力」を育てる授業の考え方と実践 図書文化
- 浅沼茂編(平成20年) 「活用型」学習をどう進めるか 教育開発研究所
- 鹿児島大学教育学部附属養護学校(平成17年) 研究紀要第15集 子どもの生活をつなぐ支援体制づくりをめざして
- 鹿児島大学教育学部附属養護学校(平成19年) 研究紀要第16集 自分のよさやもてる力を発揮する子どもを目指した授業づくり
- 鹿児島大学教育学部附属特別支援学校(平成21年) 研究紀要第17集 今を、将来をよりよく生きる子どもを目指した授業づくり
- 文部科学省(平成21年) 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領, 高等部学習指導要領
- 大久保哲夫他(平成10年) 障害児教育実践ハンドブック 旬報社
- 太田正巳(平成9年) 深みのある授業をつくる 文理閣
- 佐伯胖(平成7年) 「学び」の構造 東洋館出版社
- 佐伯胖(2009) 「わかり方」の探究 - 思索と行動の原点 - 小学館
- 高橋浩平(平成19年) 特別支援教育の子ども理解と授業づくり 黎明書房
- 玉村公二彦(平成17年) 障害児の発達理解と教育指導 三学出版